



## 第7回「高校生の神楽甲子園」

第7回「高校生の神楽甲子園」が、7月29日(土)～7月30日(日)の2日間にわたって、神楽門前湯治村で盛大に開催されました。全国各地から約3,800人を超える観衆が詰めかけ、北は岩手県から南は宮崎県までの高校生が、神楽の聖地・神楽ドームで全国各地に伝わる伝統芸能を披露しました。

平成23年に始まったこの大会は、今年も参加校も17校に増え年々盛況となっています。この大会は神楽の演技力を競う大会ではなく、時代を担う高校生が各地に伝わる伝統芸能を保存・伝承していく活動であり、また相互に交流する目的で開催しております。参加者全員に「神楽伝承奨励賞」を、安芸高田市長賞として授与していましたが、第4回大会からは、広島県知事賞として授与され、大会の意義が高く評価されています。

神楽の定義は確立されていませんが、私の独自の考えとして、人々が豊作・豊漁・無病息災を「神」に祈願する行為「神事」と定義付けております。全国各地に氏神様が存在し、氏神様を祭る神社があり、地域の人々が独自の方法で地域住民の安全・平和を祈願されていると思いま

す。そのような中、安芸高田市の神楽は、出雲・石見地方の神楽を源流に、伝承の過程で今日の様なテンポの速い、華麗な神楽になってきたと推測しています。今回の大会では、特別出演として、富山県立八尾高等学校の郷土芸能部に「越中八尾おわら」を披露していただきました。この舞は俗に言う「盆踊り」であり、豊作を祈願する富山県八尾地域の伝統行事ですが、広義の意味での神楽(神事)であると私は思っております。

神楽甲子園の運営は、参加高校生による自主運営です。会場の案内・準備・設営・清掃は各校が分担して行い、また、ポスターの図柄・デザインについても高校生が独自で作成しました。昨年は地元吉田高校、今年は岩手県葛巻高校が立案しました。

また、将来に向かっての神楽の担い手を確保するため、神楽を授業やクラブに取り入れていただけるよう、大学(日本大学・日本体育大学・龍谷大学)との連携を深めています。今年も、日本大学芸術学部の教授がオプザーバーとして参加されています。

第3回大会から出場高校の宿泊は、市



●題字：安芸高田市市長 浜田一義

# 歴史紀行

安芸高田

シリーズ「博物館コレクション」第2回  
古代瓦にみる都のかほり 前編 ~正敷殿廃寺跡~

安芸高田市歴史民俗博物館  
学芸員 和田麻衣子



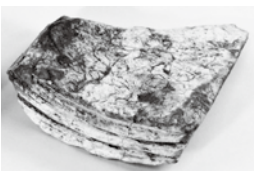
シリーズ「博物館コレクション」今回と次回は、飛鳥・奈良時代に建てられた市内にある2つの古代寺院である正敷殿廃寺跡と明官地廃寺跡について取り上げます。

### 古代寺院とは

6世紀半ばに百濟を通じて、伝来した仏教文化の一つです。当時蘇我氏の影響力により、仏教の普及が進みました。やがて6世紀後半～7世紀にかけて古代寺院は、その建設技術とともに、全国各地に普及しました。古代寺院は、それまで、古墳築造によって影響を誇示していたのにかわり、全国各地の有力者・有力氏族にとって、新たな影響力を示す象徴となりました。



※写真1 軒丸瓦(火炎文・正敷殿廃寺跡出土)



※写真2 軒丸瓦(四重弧文・正敷殿廃寺跡出土)

### 正敷殿廃寺跡

向原町長田に所在し、小規模の基壇と掘立柱建物の跡、瓦・須恵器・土製品などが見つかりました。

瓦は火炎文とよばれる軒丸瓦(写真1)が出土しました。この文様は山田寺式と呼ばれるもので、内側の花びらの中に細い筋状の模様をつけたものです。これは当時政治の中心であった大和の寺院でも、蘇我氏・渡来系氏族が関連する山田寺跡をはじめとする3つの寺院でだけみられるものです。広島県内では明官地廃寺跡(吉田町)・横見廃寺跡(三原市本郷町)に続く3例目となります。四重弧文などの特殊な文様をもつ軒丸瓦(写真2)についても大和の影響が強くみられます。

ただ、広島県内の他の寺院と比較すると小規模の寺院で出土すること、在地の製作技法が使われているのに窯跡が不明なことなどから、謎が多い資料ではありますが、文様から当時の中央政権や渡来系氏族との結びつきが考えられます。



正敷殿廃寺跡位置図

尚、同遺跡から出土した須恵器で、円面硯とよばれる硯の一部が出土していることから、文字を書くことができる知識層が存在していたことがわかり、この事実もまた、中央政権と関係の深いことを表しています。

ここで同時代の周辺遺跡に注目すると、正敷殿廃寺跡の北東にある寺之下遺跡から、有力者が住んでいたと思われる大きな建物跡が見つかります。

先の古墳時代において、向原町内では約百基もの古墳がみつかっており、後半には戸島大塚古墳を代表とする、主体部に横穴式石室をもつ古墳が多く造られました。このことから、中央と関係の深い有力者や渡来系の人々の存在が指摘されています。

後編では、関係が深い明官寺廃寺跡について紹介します。